

心半ばにして矛を収めなければならず、何か、おめおめと故郷へは帰れない気持ちでした。

昭和二十年十月二十二日、銅陵県大通に集結を命ぜられ、十一月十四日、武装解除となり、集中営生活をしながら、翌二十一年二月十五日、内地帰還のため大通出發、二十二日、上海に到着し、呉淞第三兵舎にあつて乗船準備。身体検査というより、伝染病（特にコレラ菌）の検便をしたり、所持品の検査等々、案外慌ただしい日時を過ごしました。

三月十八日、米軍のLST「QO三九号」船に乗船し出帆。同月二十二日、博多港上陸。直ちに復員式を挙行し除隊し復員しました。その数は一千人を超していましたが、入院中のため同行出来なかつた者は四十人といわれ、生死不明者もその時十余人あつたと聞きました。

博多から岐阜県の飛騨への旅は随分長かつたように感じました。家で家族との再会は感激でした。そして国府での第二の人生が始まりました。

支那大陸戦線で

九死に一生を得る

愛知県 植 田 信 夫

私は、大正十一（一九二二）年六月八日、愛知県海部郡佐織町に長男として生まれ、昭和十七年度の兵隊検査で甲種合格でした。

私の軍歴は次の通りです。

昭和十八（一九四三）年四月一日 名古屋第三師団

騎兵第三連隊戦車兵として留守隊へ入営。

六月二十八日 名古屋留守隊出發、中支

の本隊へ向かう。

七月二十八日 中支湖北省応山県郝家店

に駐留中の騎兵第三連隊

第一中隊へ編入。

昭和十九年五月十日 湘桂作戦参加のため郝家店出

発。

十一月十日 作戦終了し広西省柳州へ到着。

昭和二十年五月十五日 反転作戦のため柳州出發。

八月十九日 江西省鄱陽湖西岸において終戦を知る。

八月二十七日 安徽省池州県において軍旗奉焼。

九月五日 江蘇省鎮江に到着。

昭和二十一年三月四日 上海より乗船。

三月九日 博多入港、解隊復員式、帰郷。

私が入営した昭和十八年四月一日当時の我が家の家族は、父、母（継母）、私、妻（昭和十七年に結婚）、第三人、妹二人でした。大家族ながら若年者が多くて、私が兵役に出てゆくことは労働力の面ではマイナスでした。そうは言っても時局柄、男子の兵役は至上的最高の義務で、これを怠り、または免れたりすることは国賊、非国民と言われ、一億一心という戦時中では

た。私も身命を祖国に捧げ、欣然として死地に赴き、君恩の万分の一に報いんと、勇躍入営しました。ちなみにその時の一家の耕作面積は、水田が一町三反、畑が三反でした。

さて、私は昭和十八年七月、郝家店で第一中隊へ編入され、昭和二十年八月、江南省で終戦を知るまで二年の間、湘桂作戦、討伐、戦闘等に出勤回数は数えきれず、感状授与（第十一軍司令官横山勇）一回、戦死者約二〇〇人激戦の連続の期間、戦友の戦死は多く、敵弾の飛来は前後左右、「今度は戦死か！」「今度は負傷か！」と覚悟をしたこと幾度か、幸いにして武運に恵まれて、五体無事に生還、帰国できたことは、あたら若い命を大陸の土と化した英霊に申し訳無い気持ちでいっぱいです。私のこの出征、従軍中の一番の労苦とは？と考えると、昭和十九年七月から八月までの期間のことです。

第一番目は、七月十四日十九時三十分、梯団を組んで醴陵を出發、茶陵への急進です。

この急進の時、私は中隊指揮班で、曹長殿の当番兵として参加していました。ちょうどその時、私は不運にも腹中に回虫がたくさん寄生して体力がガタ落ちで苦しい最中でした。七月の暑い盛りの昼夜兼行の急進、昼は米支空軍がよく来襲するので夜行軍が多かったです。

一夜に一〇里ぐらい走るように急ぎ、私は体力がないので馬に荷物を全部載せて出来るだけ身軽になり、馬の尻尾を手に巻きつけて馬に引っ張ってもらい、前の者に続いて行きました。夜行軍で怖いのは小休止に居眠りをして、目が覚めると誰も居ず自分一人が取り残されている、ということ、私も一度ありました。幸いにも先へ行った本隊から一分隊が探しにきてくれて助かったのです。

回虫はその後一〜二カ月後に医務室で駆虫剤が支給されて、それを服用。回虫は全部出て、さっぱりとして体力も回復しました。

この急進の時ほど、辛く苦しい体験はないと思います。今思い出しても、よく頑張って生き延びたものよ

との感が強くあります。九死に一生です。

第二番目の労苦は、七月四日、醴陵攻防戦の中での塔嶺東端高地周辺の戦闘です。空前とも言える死闘激戦の連続で、私は「こんなにやられてはとても助からん」と覚悟すること数回、運よく助かったのが不思議に思うぐらいです。

敵は薛岳第九戦区司令官直属の第五十八軍で、豊富な銃火器掩護の下に突撃を反復し、執拗に手榴弾戦、白兵戦等の繰り返しで、そのため騎兵第三連隊の軍旗が孤立して、敵の銃砲火にさらされるといふ危機に瀕したこともありました。友軍の損害も甚大で、なかなか惨烈なことに中隊長、小隊長、指揮班長等の第一線指揮官が全て戦死しました。

敵の火砲は、我が陣前に迫撃砲一六門、それに速射砲を加えて二〇余門となりました。これが全線一斉に我が主陣地に射弾を集中し、その様相は物凄く、白煙が辺りを包み、砲弾の破片が砂塵と共に飛散し、あたかも百雷一時に落下することく、爆発音、発射音、飛行音、それに彼我の小銃・軽機関銃音が交錯し、戦場

は惨烈を極めたのです。

敵地上軍の接近に伴い、機関銃、擲弾筒てきだんとうの発射が加わり、時に絹を引き裂くような爆音と共に、真っ赤に焼けた火の玉が陣中にごろごろと転がり爆発しました。私はこんな激しい戦闘は話にも聞いたこともなく、幹部の戦死、負傷者数は数知れず、その他分隊長以下兵の損害も甚大でした。この地獄の戦線で、私は私なりに懸命に戦い、戦いが終わると不思議に生き残っていました。ちょっとしたかすり傷一つの勲章を貰ったのみでした。

本当にいくら考えても信じられない死闘でした。その場に居て共に体験したものでないと分からないと思います。実に筆舌に尽くし難しです。我が第三師団の騎兵第三連隊に所属する者は、すべて前述の激戦、死闘を経験し、先輩の偉大な伝統に劣らぬ昭和の軍人と成長して、全国に名古屋第三師団の雄名を轟かせたのです。

昭和二十年八月二十七日十八時、安徽省池州県揚子

江江岸の近くの小丘の平原において軍旗を奉焼しました。

荒涼として寂寛たる江岸近くの平原を選び、要所に歩哨を配備して警戒し、付近の柴木を集積して奉焼台を設け、連隊は所定のごとく東方に向かい整列。

連隊長の「気をつけ」「起て剣」の号令が響き、剣を立てるざわめきが終わり、剣が銃口に並び、剣襖の波頭が静止し、一瞬緊迫した雰囲気が漂いました。酒井少尉の誘導により旗手川浦少尉の奉持する軍旗を奉迎し、白井軍旗護衛小隊がこれに続き威儀を正し、連隊長の凜とした号令一下「捧げ銃」を奉拝し、奉拝式は終わりました。

今、仰ぎ見る軍旗は、金色燦然として旗棹頭徹に輝く菊花紋章と旗棹と布帛周辺の房を残すのみ。それは幾度か連隊の将兵が勇戦敢闘した歴史の象徴そのものであり、過去の赫々たる武勲は、よくこの歴戦の軍旗に表徴されていました。

軍旗は奉焼のため敵かに川浦少尉により奉焼台の上に奉安せられました。連隊本部の遠山曹長軍旗護衛兵

が旗手に介添えして柴木に点火し、連隊長は最後の「捧げ銃」の号令を下し三刀の礼を行ったのです。同時に外山副官をはじめ本部諸官、各中小隊長、帯刀本分の下士官全員刀の礼を行いました。

落陽に軍刀が一閃し、隊員の銃把を握る力強い響きと共に銃剣の襖が一線に揃い、隊伍はしばらくの間微動もしませんでした。軍旗との尺きぬ名残を惜しむ訣別の一瞬でした。

折から高く低く響き渡る莊重切々たる「国の鎮め」のラッパの吹奏は余韻嫋々としてあまりにも物悲しく、この軍旗を核心とし、鉄石の団結の下よく伝統の威烈を發揮して勇戦奮闘した将兵の感極まる嗚咽が聞こえてきました。

やがて光輝ある軍旗は紅蓮の炎に包まれ、今まさに一片の灰燼と化そうとしていました。連隊長をはじめ全将兵は、軍旗との最後の訣別に万斛の血涙を禁じ得ませんでした。幽明境を異にし、護国の英霊となった多くの靖国の戦友の慟哭が聞こえてくるようでした。

連隊長の「立て銃」「休め」の号令にも誰一人とし

て身動きせず、火の燃え尽きるのを凝視していました。連隊長はあふれ出る涙を押さえ、悲泣に耐えてじっと我慢していました。作戦の間、毎朝奉迎し、常に連隊の核心として奉護した将兵の万感悲痛は尽きるどころを知らない有様でした。

思えば明治二十九年十一月、軍旗拝受以来五十年になんなんとし、その間、日露戦争、シベリア出兵、濟南事件、満州事変、支那事変に出動し、引き続き大東亜戦争に参加して軍旗と生死を共にし、かつ幾多の感状、賞詞の光栄に輝く将兵の偉功を秘め、不滅の栄光を残して、軍旗の奉焼とともに騎兵第三連隊の戦史は終焉を告げました。ことに昭和十二年九月三日、支那事変に際し、呉淞鎮敵前上陸以来、在支八年有余の永きにわたり、中・南支の各作戦に参加し、武勲赫々たる軍旗の奉焼は、将兵として寂寥虚脱の状態たらしめたのです。また感慨無量にして、ただただ万感胸に迫り、その悲運に号泣するのみでした。

最後に昭和二十一年三月九日、博多入港、解隊、復

員、帰郷し、男児三人、孫六人に恵まれ、老夫婦共に元氣です。

農業のかたわら名古屋鉄道のサービスマスターの管理人を引き受け、毎日を忙しく暮らしています。

それについても在支期間を通じて作戦、討伐、戦闘に明け暮れ、多数の戦友を失いましたが、不思議と無事に生き残っているこの身。とりわけ軍旗奉焼という特殊な空前絶後の記念行事に参加したことは、騎兵第三連隊関係者多数の代表者として、貴重な参戦体験による労苦を孫子の代まで永く語り伝えていきたいと思えます。

そして戦争の風化予防、祖国防衛の国家的最高機運の誘導等に老後の残された尊い時間を捧げたいとの念願いっぱいです。

中国四省三八〇〇キロを歩き戦う

愛知県 國立逸雄

昭和十八（一九四三）年四月一日、第一大隊第三中隊に入隊した時の私の家族は、父岩田久次郎、母よね、妹けい子の三人で、私は地元の織物会社に勤めていた。

私の入隊した名古屋第三師団歩兵第六連隊は、中国大陸中支の湖北、湖南、広西、貴州の四省を股にかけ、徒歩作戦に明け暮れた郷土部隊である。

波多野中隊長、若杉第三小隊長、安藤班長の初年兵教育を受け、軽機関銃射手を命ぜられ、小幡ヶ原演習場で鍛えられ、一期の検閲後の六月二十五日、下関で乗船、釜山、山海関、南京、漢口、広水を経て連隊本部のある浙河の町に着いたのが七月二十三日で、この間約一カ月の旅であった。

ここで第二期の検閲を受けるべく、訓練中の八月に